



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

「総合的な学習の時間」におけるキャリア教育の考察：中学校での学びを中心に

著者	天野 義美
雑誌名	教職教育研究：教職教育研究センター紀要
号	24
ページ	53-60
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028402

「総合的な学習の時間」におけるキャリア教育の考察

— 中学校での学びを中心に —

天 野 義 美

はじめに

キャリア教育について、今回改訂された中学校学習指導要領（平成29年告示）の第1章総則第4の1の(3)には、

「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。」

と明示されている。

すなわち、キャリア教育は、特別活動を中核として、各教科等の特質に応じて、教育活動全体を通じて充実を図るものである。当然、総合的な学習の時間においても、その特質に応じたキャリア教育の実施が求められている。

そこで本稿では、総合的な学習の時間におけるキャリア教育について、中学校での取り組みを中心にその現状と課題、展望について考察する。

1 総合的な学習の時間とキャリア教育との関連

(1) 学習指導要領の総則から読み取れる関連

学習指導要領の第1章総則には、学校の教育活動全体で育むもの、または、各教科等の特質に応じて充実を図るものとして、「道德教育」、「体育・健康に関する指導」、「生きる力」、「言語能力」、「キャリア教育」の5点が記載されている。その中でも、「～を要として」あるいは「～を要としつつ」学校の教育活動全体を通じて行うという趣旨で記述されているのが、「道德教育」、「言語能力」、「キャリア教育」の3点である。

この3点について、今少し、「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編」を読み解くと、道德教育の充実に関しては、

「学校における道德教育は、特別の教科である道德

（以下「道德科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道德科はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行うこと」

とある。

また、言語能力の充実に関しては、

「言語活動の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、生徒の言語活動を充実すること。」

とあり、その具体説明には、各教科、道德科、総合的な学習の時間、特別活動の順で事例が列記されている。

「要」の文言が用いられていない、「体育・健康に関する指導」、「生きる力」に関しても、教育活動全体についての説明内容は、この順で示されている。

しかし、キャリア教育の充実に関しては、

「キャリア教育を効果的に展開していくためには、特別活動の学級活動を要としながら、総合的な学習の時間や学校行事、道德科や各教科における学習、個別指導としての教育相談等の機会を生かしつつ、学校の教育活動全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取組が重要になる。」

と解説されている。

ここで注視したいのは、「学校の教育活動全体」及び「各教科等」の内容について、キャリア教育以外は、学校教育法施行規則第七十二条で示されている教育課程の編成内容の記載順（各教科、道德科、総合的な学習の時間、特別活動の順）に従って記されているが、キャリア教育ではその順に従うことなく、総合的な学習の時間が、内容の筆頭に記されていることである。

これは、キャリア教育は、学級活動を要として学校の教育活動全体を通してその育成を図るとするものの、総合的な学習の時間との関連が非常に強いことを意味しているものに他ならない。

但し、中学校学習指導要領の第4章「総合的な学習の時間」の中には、キャリア教育という言葉は全く用いられていない。総合的な学習の時間の目標を実現するにふさわしい探究的な課題¹⁾の例として示されている、「職業や自己の将来に関する課題」が、キャリア教育に相当するものと考えられる。

(2) 創設時期、初出時期から読み取れる関連

総合的な学習の時間は、平成10・11年に改訂された小中高の学習指導要領の総則の中で、初めて設置された教育活動である。

変化の激しい社会に対応できる力を育成する趣旨のもと、

- ・生徒が自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質・能力を育てる。
- ・学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究に、主体的・創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

というねらいで創設された。従来の教科の枠にとらわれることなく、横断的・総合的な学習活動で、目標や内容は地域や児童生徒の実態に即して各学校で設定するものとされている。

一方、キャリア教育という用語が初めて公的に登場したのは、平成11年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」であった。背景には、社会環境の急激な変化に対応する勤労観、職業観を確立することが求められ、そのために、学校の学習と社会とを関連付けた教育が必要とされたことが挙げられる。

その後、キャリア教育推進に関する数々の施策が打ち出され、平成18年11月の文部科学省「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き」で、キャリアとは、

「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」

と定義された。また、平成23年1月の中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育²⁾の在り方について（答申）」で、キャリア教育の定義が、

「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」

と定められた。

しかし、一般的には、キャリア教育は学校において全く新しい教育活動を取り入れるのではなく、これまで取り組んできた教育活動全体についてキャリア教育の視点で見直して整理し、それぞれをつなぐ工夫をすることが、その推進を図るうえで先ず必要とされた。

こうして、各学校現場では、総合的な学習の時間やキャリア教育について、独自の特色を生かした取り組みを展開するようになるのだが、いずれにしても、総合的な学習の時間の創設と、キャリア教育の初出とは、時期をほぼ同じくしていることに着目しておきたい。このこともまた、総合的な学習の時間とキャリア教育との関連性が強いものになっている一因と思われる。総合的な学習の時間の理念は、キャリア教育の趣旨と双方向的に呼応する関係であったと捉えられる。

2 総合的な学習の時間でのキャリア教育の現状と課題

(1) 何でもありになっていないか総合的な学習の時間

総合的な学習の時間が創設されたころ、各学校現場では、その理念の追究と教育的意義の理解に取り組み、様々な授業実践と成果についての検証に努めてきた。勿論、今なおその取り組みは継続されているわけだが、創設から20年以上が経過して、果たして総合的な学習の時間の目標や特質を踏まえた授業が適切に展開されているか、点検する必要の時期に来ていると思われる。

そもそも、総合的な学習の時間は、その性格上、名称、目標、全体計画、年間計画、内容、評価等は、学校ごとに定めることになっている。指導内容や指導方法が学校の創意工夫に委ねられたことは、学校独自の特色ある取り組みが可能となる反面、難しさと戸惑い感を招くことにもなった。教科書が無いことも相まって、年間計画が大雑把になったり、行き当たりばったりの活動になったり、いつしか、学校や学年にとって使い勝手のよい、便宜的に活用できる時間にもなってしまった。

また、平成20年の学習指導要領改訂で、第4章として教育課程に位置付いたわけだが、年間標準授業時数が「中1で70～100時間が50時間に、中2で70～105時間が70時間に、中3で70～130時間が70時間に」減じられたことは、教科学習が中心となっている学校現場に、総合的な学習の時間を軽んじる風潮をもたらすことになった。加えて、入試に関係の無い教育活動という受け止め方が、その風潮に拍車をかけた。

これらの事が複合的に作用し、総合的な学習の時間本来の趣旨が生かされていない取り組みが、多くの学校で散見されるようになったことは否めない。

その傾向を探るため、筆者が担当する講義の履修生に、「中学時代の総合的な学習の時間に取り組んだ代表

的な内容（単元・題材・活動）」を尋ねてみた。様々な取り組みが報告されたが、大まかに分類してまとめたのが、表-1である。（平成29年11月と30年11月に、6大学の2～4回生588名を対象に自由記述でのアンケートを実施。）

表-1 中学時代の代表的な「総合的な学習の時間」
記入のあった事柄を大まかな枠組みで分類集計

職場体験活動 (含 事前・事後学習)	23.4
地域に関する学習 (歴史、伝統文化、名所、地場産業、偉人、暮らし等)	9.2
人権に関する学習 (いじめ、部落、人種、民族、宗教、女性、LGBT等)	6.8
平和に関する学習 (含 修学旅行の事前・事後学習) (戦争、紛争、国連、憲法9条、原爆、沖縄等)	6.8
福祉に関する学習 (障害者、高齢者、疑似体験、ボランティア等)	6.1
職業調べ・職業人講話 (キャリアインタビュー、著名人・卒業生の体験談等)	4.1
上級学校の訪問 (含 高校・大学教員の出前授業) (高校・専門学校見学、参観、体験入学等)	3.1
防災・減災に関する学習 (災害調べ、ハザードマップ、避難訓練、震災体験等)	2.7
社会問題に関する学習 (交通事故、公害、情報モラル、プラゴミ、温暖化等)	2.4
自己探求に関する学習 (自己PR、自分史、未来の自分への手紙、将来の夢等)	2.0
保健・健康に関する学習 (薬物、喫煙、癌、性、スマホ依存、食、ストレス等)	1.4
国際理解・国際交流に関する学習 (異文化体験、外国人との交流、文化圏、生活様式等)	1.4
★学校行事に類する活動 (文化祭、音楽祭、芸術鑑賞、球技大会、体育祭等)	18.7
★学級活動に類する活動 (係活動、仲間づくり、席替、学級目標、集会活動等)	2.7
★道徳に関する学習 (道徳の時間、宗教の時間)	2.4
★生徒会活動に類する活動 (募金、総会、委員会、園児や他校生との交流等)	1.7
その他 (弁論大会、ディベート、ブックガイド、食事マナー、フィールドワーク、人工蘇生、ものづくり等)	5.1

(数字は%)

★印は、総合的な学習の時間としては疑問のある項目

アンケート結果で最も回答が多かったのは、職場体験活動である。職場体験の学びが、生徒に強い印象と影響を与えている表れと思われる。職場体験活動は、多くの公立中学校で実施されているが、現在のところ、私立、国立の中学校では殆ど取り組まれていない。

職場体験活動以外にも学習指導要領の内容の例示にある、国際理解、情報、環境、福祉・健康に類する課題を

始め、実に多種多様な学習が総合的な学習の時間で取り組まれている。その大半は、学校独自の取り組みが進んでいることがうかがわれる。しかし、中には、特別活動や道徳科や教育課程外の教育活動との混同があるなど、総合的な学習の時間の活用として果たして適切なのか、と思えるものもある。また、総合的な学習の時間として取り上げられてはいても、文化祭の準備や練習など課題探究学習の体をなしていない展開のものも多かった。表中の「その他」には、「遊びの時間」、「受験勉強の時間」、「自習の時間」、「無かった（教科学習への転用）」などの回答もあった。

ちなみに、筆者が勤務した中学校3校に於いても、年間計画に位置付く重点単元以外は、総合的な学習の時間が便宜的に活用されることが多々あった。まさに、何でもありの総合的な学習の時間であった。

(2) 職場体験でよしとしていないかキャリア教育

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが7年ごとに実施している「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」(平成24年度実施)によると、公立中学校の89.5%が、第2学年で職場体験活動を実施している。調査の中の生徒対象調査では、職場体験活動が「自分の将来の生き方や進路を考える上で役立った」が88.6%（そう思う、少しはそう思う）、「有意義な学習だと思う」が87.4%（同）と、肯定的に答えている生徒が圧倒的に多かった。

そこで、同調査時に対象学年の中学2年だった現在の大学2回生に、6年前の職場体験活動に対する意識を改めて尋ねてみた。（平成31年1月に、3大学96名の協力を得て実施。）

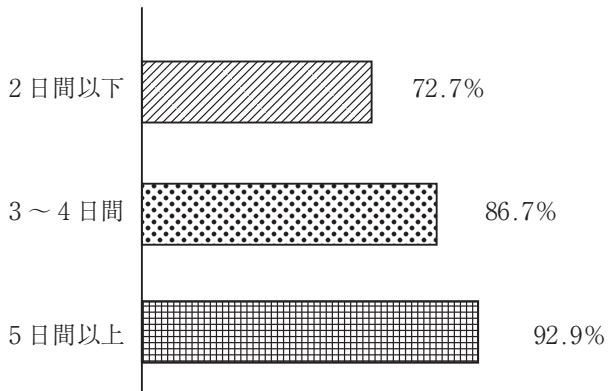
回答結果では、全体の87.5%が総合的な学習の時間に職場体験活動を経験しており、公立中学校出身者に限れば97.6%が経験したと答えている。

職場体験活動の実施日数は、学校や自治体によって異なり、1日だけ（2.4%）、2日間（22.0%）、3日間（31.7%）、4日間（7.3%）、5日間（34.1%）、6日以上（2.4%）であった。

振り返ってみての感想では、「役立った」「有意義だった」など肯定的な捉え方が85.5%だった。活動を体験した6年前とほぼ同じ数値で、成人した現在でも職場体験活動がもたらした影響の大きさを物語っている。

職場体験活動の肯定的感想を、活動日数によって、2日間以下、3～4日間、5日間以上の3群に分けて考察すると、グラフ-1のように、活動日数が多いほど肯定的感想を抱く傾向が読み取れる。

グラフ-1 職場体験活動実施日数ごとの肯定的感想者数の割合



主な肯定的感想（要約）には、

- ・働いている方々の姿勢や取り組み方が学べた。
- ・初めて働くことについて考えた2日間だった。
- ・客に対するおもてなしの心がすごいと感心した。
- ・失敗できない責任の大切さを味わった。
- ・職場の実際の雰囲気を感じることができた。
- ・ふれあいやコミュニケーションの大切さを学んだ。
- ・人との接し方、話し方に気を付けるようになった。
- ・学校で教える立場の人を見て教職を細かく知った。
- ・人間関係や人とのかかわり方が身に付いた。
- ・働くということのイメージを抱くことができた。
- ・笑顔の大切さが分かり、実践できるようになった。
- ・テキパキと必死に働いている姿に凄いなと思った。
- ・学校ではできない様々な体験ができた。
- ・気持ちよく働ける工夫がたくさんあって感心した。
- ・働くことの大変さ、難しさにやりがいを感じた。
- ・高齢者施設での体験が基で、音楽療法を専攻した。

など、職場体験活動のねらいが反映されたものが多かった。

なお、肯定的感想を抱かなかった理由では、

- ・何が目的の活動だったのか、よく分からなかった。
- ・働いている人の外向け内向けの二面性に幻滅した。
- ・単純な作業ばかりで、身に付くことは余りなかつた。

た。

- ・ギスギスした雰囲気や、夢だった保育士を諦めた。
- ・労働力の補助をしたに過ぎなかった。

などがあつた。生徒への課題意識の持たせ方、受け入れ先に趣旨を十分理解してもらう打ち合わせ方などが、課題と考えられる。

また、総合的な学習の時間で取り組んだ、職場体験活動以外のキャリア教育について尋ねた結果が、表-2である。（該当項目を複数回答。企画・実施の有無に着目しているため、実施した学年は不問。）

表-2 職場体験活動以外に取り組んだキャリア教育

①働いている人・社会人からの講話・講演	47.9
②自己の生き方や将来設計についての話し合い	45.8
③職場の訪問・見学	43.8
④働いている人へのインタビュー・聞き取り	43.8
⑤農業・漁業・林業等の第一次産業体験	39.6
⑥出前授業等での技能指導・実技体験	33.3
⑦上級学校の訪問・見学	29.2
⑧その他（地域貢献、高校・大学教員の講義等）	4.2
・なし	18.8

（数字は％）

キャリア教育について、各校では工夫を凝らした様々な体験活動や体験的活動が取り組まれている。しかし、実施率は職場体験活動の87.5％に比べるといずれも低い。しかも、18.8％は職場体験活動以外に学習したキャリア教育は無かったと答えている。

ここから推測されるのは、職場体験活動（事前学習・事後学習の時間を含む）をもってキャリア教育を実施していると捉えている学校が多いことである。

このことは、平成28年12月に中央教育審議会が示した「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」でも、「職場体験活動のみをもってキャリア教育を行ったものとしているのではないかと指摘されている。

3 総合的な学習の時間でのキャリア教育の展望

(1) 総合的な学習の時間の本質に応じたキャリア教育

キャリア教育は特別活動の学級活動を要として全教育活動で取り組むものではあるが、その中でも総合的な学習の時間は、適切で有効な時間のひとつである。しか

し、総合的な学習の時間にキャリア教育を展開する場合、あくまで、総合的な学習の時間の趣旨、特質を踏まえたものでなければならない。

まず、自校の総合的な学習の時間の目標を達成するための、年間計画に位置付くキャリア教育であることが絶対条件である。すなわち、キャリア教育の取り組みは、総合的な学習の時間の目標を意識した内容であることが求められる。目標を具現化するにふさわしい探究課題に相当するキャリア教育でなければならない。

加えて、今回改訂された学習指導要領の総則には、「各学校の教育目標を設定するに当たって、学校で定める総合的な学習の時間の目標との関連を図る」ことが規定されている。ということは、学校の教育目標と総合的な学習の時間の目標とは、直接的につながるものであるから、総合的な学習の時間で行う場合のキャリア教育もまた、学校教育目標に直接的なつながりがあるとの認識が不可欠である。

次に、総合的な学習の時間で行うキャリア教育は、協働的な探究活動のプロセスを踏まえて構築したものでなければならない。

総合的な学習の時間は、基本的に、課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現という探究的な学習のプロセスをスパイラル的に繰り返し、連続的に積み重ねる学習である。勿論、この探究的な学習の過程は、固定的に捉える必要はなく、順序が入れ替わったり、一つの単元の中でいくつか繰り返されたりするなど、弾力的に運用されることもあるが、大切なのは、探究プロセスのイメージを抱いて学習に取り組ませるということである。これは、総合的な学習の時間の特質であるので、この時間を活用してキャリア教育を実施する場合には、当然、課題探究活動のプロセスに沿うものであることが前提となる。換言すれば、生徒の課題意識が希薄だったり、解決に向けての活動が不十分だったり、結果を表現する場が乏しかったりするキャリア教育では、総合的な学習の時間に馴染まないということになる。

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編」には、第4章第2節2の(8)で、「職業や自己の将来に関する学習」について、

「働くことや職業を自分との関りで考えることや、自己の将来を展望しようとすることは、自己の生き方を考えることに直接つながる重要な学習である。

その際、問題の解決や探究活動を通して行うことが欠かせない。生徒が自ら職業や自己の将来に関わる課題を設定し、自らの力で解決に取り組み、その結果として生徒一人一人が自己の生き方を真剣に考える学習活動が展開されることが求められる。」

と解説されている。

協働的な探究活動のプロセスが展開されてこそ、生徒一人一人が自己の生き方を真剣に考え、学ぶ意味や自己の将来、人生について考えるというキャリア教育のねらいが、効果的に達成できるものと期待される。

(2) 学校間・学年間の接続を図ったキャリア教育

キャリア教育という文言は、これまで高等学校の学習指導要領の第1章総則の第5款5-(4)に、

「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること。」

と示され、小中学校の学習指導要領には記載されていなかった。しかし、今回の学習指導要領の改訂で、小中高とも、特別活動の学級活動（ホームルーム活動）の内容(3)に、「一人一人のキャリア形成と自己実現」として明記された。「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基礎となる資質・能力を身に付けていくことができるようにした」（各学習指導要領総則）に基づいている。

小学校の学級活動においては、これまでの内容(2)の項目を整理したものを再構成し、キャリア教育に関する項目を内容(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」として新たに起こした。キャリア教育本来の役割を明確にするために、小学校段階から特別活動の中にキャリア教育の視点を入れることが重要であるという中央教育審議会の答申（平成28年12月、前述）を受けての見直しである。

中学校の学級活動と高等学校のホームルーム活動においては、これまでの内容(3)「学業と進路」をキャリア教育の視点で見直し、新しく内容(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」として整理した。これは、従来の進路指導が、社会への接続を考慮せず、次の学校段階への進学のみを見据えた指導（いわゆる出口指導）になっているのではないかという指摘（同、中教審答申）に基づく改正である。

これによって、キャリア教育は、12年間で体系的に取り組むべき学習内容となった³⁾。当然、総合的な学習の時間でのキャリア教育にも、体系的、系統的な取り組みが求められることになる。総合的な学習の時間の本質を踏まえたキャリア教育を、小～中～高の学校段階間接続や、1～2～3年の学年間接続を図るような創意と工夫が必要となった。

職業に関する理解を目的とした活動で考えてみると、学校段階間接続では、例えば、小学校での職場見学の発展が、中学校での職場体験活動につながり、その経験が

また、高等学校での就業体験活動（含 アカデミックインターンシップ）に生かされるような工夫が考えられる⁴⁾。それにより、それぞれの体験活動が発展的につながり、より有効なキャリア形成として機能することが期待される。

学年間接続では、例えば、1年で社会人による職業講話学習や職業調べ活動、2年で職場体験活動や体験成果発表、3年で上級学校や職場訪問、高校体験入学など、それぞれの体験学習の系統性を検討することによって、キャリア形成の充実を図ることが期待される。

また、社会参画力の育成や、人間としての在り方生き方を考える学習では、例えば、1年で社会に役立つ自分を知る自己理解をねらいとした活動、2年で社会に役立つ自分を目指した自己変革をねらいとした活動、3年で自分のよさを生かして社会参画できる自己実現をねらいとした活動など、継続性・発展性を工夫することで多大な効果が期待できる。

総合的な学習の時間におけるキャリア教育は、細切れの取り組みに終わらせるのではなく、点での取り組み（例えば、表-2にあるような取り組み）をいくつかつないで、点から点への接続で線の取り組みに体系化することによって、より有意義なものに成り得ると考える。そのためにも、3年間のキャリア教育の学びを明確にした全体計画の作成が望まれる。

(3) 最後には、今の生き方に落とし込むキャリア教育

キャリア教育は、先行き不透明な未来社会においても、一人一人が社会的・職業的自立に向けて必要な基礎となる資質・能力（基礎的・汎用的能力⁵⁾）を育成するものである。

今の中学生が、成人して社会で活躍するころには、

- ・ 少子高齢化が進み、極度に減少する生産年齢人口
- ・ 人生100年時代を迎え、余儀なくされる人生再設計
- ・ グローバル化の波で、加速化する多文化共生社会
- ・ 絶え間ない技術革新で、消滅・減少する職業や労働
- ・ 人工知能（AI）の進化がもたらす Society5.0⁶⁾

など、予測できないほど激しい変化が到来する。だからこそ、先行き不透明な未来社会に生きる力の育成が必要とされ、生徒のキャリア形成が求められている。

先行き不透明な未来社会に向けてのキャリア形成は、未来・将来を想定した中長期の展望計画と、間近な近未来の事象に向けての短期計画とを平行して考えさせていくのが妥当である。

もともと、キャリア教育の必要性が叫ばれ始めたの

は、ニートやフリーターの若者が増えた社会事象や、一流企業の破産が相次ぎ、良い会社に入れば安泰という定石が崩れ始めたことなどへの対応からであった。学校での学びと社会での生き方をつなぐことが求められ、職業観、勤労観、就業観を生徒の発達段階に即した形で身に付けさせていこうとするところに当初の思惑があった。現在では、それが勤労観等に留まらず、社会の形成者として人生をいかに誇り高く生きていくかという、有意義な生き方や自己実現に結び付く学習が、一般的なキャリア教育の捉え方になっている。働くことを含め、自分の人生や生き方・在り方について、主体的に考える力を育成することが最大のねらいになっている。

したがって、総合的な学習の時間におけるキャリア教育も、そのゴールは「自己の生き方を考えさせる」ことであり、最終的には、「自分はどのような生き方をするか」に結び付く教育である。

先行き不透明な未来社会の中で、この「どのような生き方をするか」が、職業観や勤労観等をも含めての長期計画となる。自分の夢や希望を抱いてどう生きるかは、生徒にとって興味深く、切実で重要な課題ではあるが、中学生の段階では、はなはだ抽象的で漠然としているのは、当然で止むを得ない。片や、生徒には、テスト、進級、卒業、進路など日々の学習や生活、或いは直面している諸問題の解決や、当面の方向を決定しなければならない現実的な課題がある。これが短期計画である。短期計画の取り組みを一つ一つつないでいくうちに、漠然としていた中長期計画の姿が見えてきたり、より自分にふさわしい計画に修正したりしながら、自己のキャリアを形成していくことになる。

キャリア形成の学びは、中長期計画も短期計画も、将来の自分を描いていく積み重ねである。広くは、どんな仕事がしたいとか、どんな職業に就きたいとか、どういう家庭を築いていきたいとか、社会とどう関わっていくとか、人間としてどう生きるべきかなど、自己の将来に目を向けての学習である。

しかし、生き方を考えるのがキャリア教育のゴールであるとはいえ、未来志向に終始するのがキャリア教育ではない。最も大切なのは、未来や将来の社会での生き方を模索しながらも、その学びを今の自分の生き方に反映させることである。

将来の生き方を考えるからこそ、「今の自分はどうか」「自分にとって、今必要なのは何なのか」「今をどう生きるべきか」「今、何をどのように学習すべきか」「今の生活や仲間をどれだけ大切にするか」「今あるものにどれだけ向き合えるか」など、自分の身近な生活、目の前の現実にとり込んで考えさせることが最も求められるキャリア教育である。この営みが、就中、自らの人生を切り拓き、マネジメントできる力に

なっていくものと思われる。

おわりに

中学生の発達段階は、自我の目覚めとともに独立の欲求が高まり、自己内省をし始める時期である。自己を探究し始め、自分と社会とのかかわりや将来の生き方に関心を抱く時期でもある。大人に近づく実感とともに、将来を展望したり、社会で働く意味を考えたり、卒業後の進路や人間としての生き方に悩んだりしながら、日々成長する多感な時代である。

そのような時期にある中学生にとって、キャリア教育は、人間形成上、非常に適切で有効な、極めて重要な学びである。生徒は、学びを通して、自らの将来の姿を描き、その実現に向けて意欲的に学習に取り組み、価値ある人生を目指して自己を形成していく。

総合的な学習の時間は、職場体験を始め、生徒のキャリア形成を効果的に図る上で期待される時間である。そのためには、家庭、地域社会、産業界など幅広い人材の協力や、商工会議所等、各種団体・施設が行う出前授業、ものづくり講座等、体験活動や体験的活動を計画的、組織的に導入することで、豊かなキャリア教育が可能となる。そして、何よりも、キャリア教育を探究的な学習の時間の過程に適切に位置付けることが、その効果を高めるうえで重要となる。

引き続き、探究的な学習の過程を質的に高めるキャリア教育の在り方について、追究と考察に取り組んでいきたい。

注)

- 1) 探究課題の例
 - ・現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題
 - ・地域や学校の特色に応じた課題
 - ・生徒の興味・関心に基づく課題
 - ・職業や自己の将来に関する課題 (学習指導要領)
- 2) キャリア教育：一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度の育成。普通教育・専門教育を問わず様々な教育活動の中で実施される。職業教育も含まれる。
職業教育：一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度の育成。具体的職業に関する教育を通して行われる。 (文部科学省)
- 3) キャリア発達段階
小学校：進路の探索・選択にかかる基礎形成の時期
中学校：現実的探索と暫定的選択の時期
高等学校：現実的探索・試行と社会的移行準備の時期 (キャリア教育推進の手引き)
- 4) 職場見学：工場見学や商店街見学等を通して、働いている人々の様子、思い、工夫、努力を知る活動
職場体験活動：ある職業や仕事を暫定的な窓口としながら実社会の現実に向き合う活動
就業体験活動：将来進む可能性のある職業に関連する活

動を試行的に体験することを通して、社会人、職業人への移行準備に役立てる活動 (文部科学省)

- 5) 基礎的・汎用的能力
分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力。その能力は、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解、自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の四つの能力で構成されている。 (文部科学省)
- 6) Society5.0
人類史上5番目の新しい社会。IOT、AIの進歩で期待される、サイバー (仮想) 空間とフィジカル (現実) 空間が高度に融合された超スマート社会。(Society1.0は狩猟社会、Society2.0は農耕社会、Society3.0は工業社会、Society4.0は情報社会を意味する。) (内閣府の科学技術政策)

参考文献

- 文部科学省 (2017)「中学校学習指導要領 (平成29年告示)」(東山書房)
- 文部科学省 (2017)「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総則編」(東山書房)
- 文部科学省 (2017)「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総合的な学習の時間編」(東山書房)
- 文部科学省 (2017)「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別活動編」(東山書房)
- 文部科学省 (2010)「(中学校編) 今、求められる力を高める 総合的な学習の時間の展開」(教育図書)
- 文部科学省 (2010)「キャリア教育のススメ」(東京書籍)
- 文部科学省 (2011)「中学校 キャリア教育の手引き」(教育出版)
- 文部科学省 (2011)「小学校 キャリア教育の手引き」(教育出版)
- 文部科学省 (2016)「変わる！ キャリア教育」(ミネルヴァ書房)
- 服部次郎 (2014)「産業社会と人間 よりよき高校生活のために」(学事出版) pp. 48-82
- 文部科学省 (2016)「学級・学校文化を創る特別活動 中学校編」(東京書籍) pp. 62-67
- 文部科学省 (2019)「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」(文溪堂) pp. 84-94
- 渋谷一典 (2017.11 中等教育資料 No978)「新学習指導要領における総合的な学習の時間のポイント」(学事出版) pp. 22-25
- 奈須正裕 (2017.11 中等教育資料 No978)「総合的な学習の時間における内容の設定と授業づくり」(学事出版) pp. 26-29
- 渋谷一典 (2018.11 中等教育資料 No990)「新学習指導要領における総合的な探究の時間のポイント」(学事出版) pp. 20-23
- 松田淑子 (2018.11 中等教育資料 No990)「高等学校学習指導要領の改訂と総合的な探究の時間の意義と展望」(学事出版) pp. 24-27
- 文部科学省 (2019.2 中等教育資料 No993)「キャリア教育の推進」(学事出版) pp. 12-15
- 望月由紀 (2019.2 中等教育資料 No993)「キャリア教育と今後の学校教育の在り方」(学事出版) pp. 16-21
- 渋谷一典 (2017.7 初等教育資料 No955)「学習指導要領改訂のポイント 総合的な学習の時間」(東洋館出版社) pp. 38-49

- 藤田晃之（2019.2 初等教育資料 No977）「子供の発達を支えるキャリア教育の展開」（東洋館出版社）pp. 14-17
- 渋谷一典（2019.2 初等教育資料 No977）「総合的な学習の時間の特質に応じたキャリア教育」（東洋館出版社）pp. 40-41
- 小谷正登（2014）「進路指導とキャリア教育の関係に関する研究—小学生の生活実態調査の結果をもとに—」（関西学院大学教職研究センター紀要 第19号）pp. 41-50
- 林幸克（2015）「高等学校におけるキャリア教育に関する実証的研究」（日本特別活動学会紀要第23号）pp. 41-48
- 小谷正登（2017）「高校生のキャリア教育に関する研究—生徒4069名の生活実態調査の結果をもとに—」（関西学院大学教職研究センター紀要 第22号）pp. 39-49
- 宮田延実（2018）「小学生のキャリア形成を促進する特別活動の役割」（日本特別活動学会紀要第26号）pp. 39-47
- 勝田みな（2018）「総合的な学習の時間のこれまでの成果と今後の課題—小学校における総合的な学習の時間を中心に—」（名古屋経営短期大学子育て環境支援研究センター 子ども学研究論集 第10号）pp. 95-104
- 沼田潤・長谷川精一（2018）「特別活動・総合的な学習の時間における主体的・対話的な学びを促す教育方法」（相愛大学研究論集 第34号）pp. 95-103
- 藤田晃之（2016）「キャリア教育よもやま話」第2、8、11、20、26話 <http://www.human.tsukuba.ac.jp/~tfujita/topics/20160802.html> 2018.11.28閲覧
- 長田徹（2017）「新たな学習指導要領におけるキャリア教育」 <https://ci.nil.ac.jp/naid/40021237222/> 2019.3.4閲覧
- 兵庫県立須磨東高等学校（2019）「文部科学省研究開発指定校実施報告書」pp. 60-71
- 立命館宇治中学校・高等学校（2019）「文部科学省研究開発学校・総合的な探究の時間先行実施 コア探究実施報告書」pp. 65-84
- 岐阜市立陽南中学校（2018）「研究紀要 自立した学びを実現する生徒の育成」総合的な学習の時間「とびら」pp. 1-12
- 高槻市立第四中学校（2018）「研究冊子 今の課題に向き合い、未来をよりよく生きる力を育てる」pp. 1-16, p. 26
- 池田市立ほそごう学園（2019）「大阪府教育委員会確かな学びを育くむ学校づくり推進事業 研究紀要」pp. 13-20
- 京都市立春日丘中学校（2019）「国立教育政策研究所指定校事業 研究報告書」p. 19, p. 30
- 中日新聞 2013.2.9朝刊 p. 23「中学生の職場体験学習」
- 朝日新聞 2017.6.28朝刊 p. 18「将来、なんになろうを学ぶ」

（あまの よしみ・関西学院大学非常勤講師）